

JAPAN

2 1 0 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100



角すて塔へモ
いりありて

波松

以

松

昭和八年四月三日
神保五彌氏贈

58 2846

本
利

風
花
情

春

告
鳥

卷之十二

金龍山人狂訓亭

江戸

爲
永
春

水著

第廿三章

「種のあづまの鳴るの音をやきつきの鳴らす。
かほそまとあづまの向方にかほの家が、ニサク。
そよぎやう風の絆同がよとゆく家ちと風を引ひく。
左振ひを引きたはづく平ひが癒す。遠くわき風をも
引ぜや兄弟一齊妙み猿が坐す。一木すすむ町の煙をも

ハテナアリ 没者^{さへや}が^ふを画くわらを圓^{まん}の^まアヌ^ムシ^ト
舊^ふのう^一本^のの^ま本^の^ま「モモ^{モモ}の司」 □「刻^カタ^ムノ^クマ^トシ^ムミ^ニス^ト
ミ^ハシ^タマ^リア^ム」

居^ルくわら今^ス夜^ハ田舎^カあ^リとを^き奢^しら^シメ^テノ^ノイ^シ集^めか^シム^エユウ
あ^リト^ヨう^リ天^{てん}鼓^が羅^らみ^はヤ^ナ □「^エキ^ビら^マヤ^フき^むく^よう^ギ^ギ^ギ
エ^キキ^アラ^マシ^マリ^スア^マリ^スヨ^ウの^ス晩^{ばん}闇^{やみ}シ^グ汲^くと^かる^うら^ヒ
金^{きん}持^もキ^マ方^かグ^ス天^{てん}鼓^が羅^らを^き奢^しら^シム^ト「^ヲヤ^ハシ^タレ^シム^ト
あ^トと^リア^マサ^マジ^ガハ^アキ^マ方^かグ^ス奢^しる^のざ^ハね^ハの^ス召^めだ^シト^カ
び^シひ^アラ^ミト^ヨう^リ天^{てん}鼓^が羅^らの^ス奢^しど^リス^ト圓^{まん}の^スギ^ツト

り^ム男^のジ^ゼ「アレ^ハア^マラ^ミ左^さ根^ね左^さ根^ねと^明日^の晩^{ばん}の^ス渡^{ハシ}る^{ハシ}
す[」] □「正^ム俗^ハの^ス渡^{ハシ}メ^テラ^アシ^マ「^カくわへ^ル晩^{ばん}の^ス母^ハ
お^はい^マ左^さ根^ねの^ス渡^{ハシ}る^{ハシ}け^ガナ[」] □「^ナニ^ク母^ハの^ス奴^{ハシ}エ^カの^ス
あ^ハも^ハシ^ツ遠^{ハシ}シ^タれ^ドも^ハ行^{ハシ}ハ^ヤア^{ハシ}メ^テ左^さ根^ね他^{ハシ}で^{ハシ}
ね^{ハシ}ら^シ往^{ハシ}く^ス來^{ハシ}わ^クけ^ヤア^{ハシ}メ^テ左^さ根^ねメ^テ左^さ根^ねト^の^ス
本^{ハシ}歲^{ハシ}太^{ハシ}サ[」] □「歲^{ハシ}き^マサ^{ハシ}メ^テ往^{ハシ}う^スお^カト^のの^ス
本^{ハシ}歲^{ハシ}太^{ハシ}サ[」] □「歲^{ハシ}き^マサ^{ハシ}メ^テ往^{ハシ}う^スお^カト^のの^ス
せ^{ハシ}ラ^シ往^{ハシ}く^ス來^{ハシ}わ^クけ^ヤア^{ハシ}メ^テ左^さ根^ねコ^ス

大主の娘お主がまつれをあひであひでゆきむらにんくに英靈エイ
アキシムア人あそのり、娘むすめをうつそつれそづれしがねねらふ
アリアリ 朝あさ 一 東蓮とうれんの尼おと尼をあくもあくもあ三波み
夫子おきが大勢おおぜきうどく居ゐらアありめくめく心こころかくへ
娘むすめうらうらめくめくあくあく「おぞんやおぞんのまひとくうる
おぞんやおぞん。アサあさせんとりひのふ」
あくあくを思おもひひアス。アノ先刻さきを狼おおこことすすが
狼おおくく、「わわのゆゆ。アアの麻ま代えハ代えハハ

ね。アミエアミエ師し西にしさんハは強わくわうてうひがひああきんきんが同と
道みちの往いととああききううむむ。アモヨアモヨうやうやおおととああう
さんと三さん人じん。アモヨアモヨううはは浦うらええううががあるヨヨ。アモヨアモヨ
アモヨアモヨのの山やまの延のぶ津つええううササトトおおせせここうう。アアの山やま不ふ良らう地じトトおおせせここうう。
アモヨアモヨううはは強わくわ。アアはは時とき空そらををほほ。

ト第ひかづつようひそ
あ
相うちよひそあ然さんとようへ
「ハアうがく
ナシト相ひよかむねト方々まざる
だせ氣障あるのかもわへた
「左隠ヨあの嬢ちセ
ト第ひつひのぶよつうでねくら新めじゼ
嬢みづく嬢女ハあらわ
「めどもあらうづくのよ密儀
りとおもて居るから金よきても勤めねどらふのびら

「今夜はすこし夜が遅めで
寝る事すこし遅くまで起きてや
さうもゆき延べのあまねくおで
てもうあくびをあくびをあくびを
よつてから「ナラニモドガキアリ
色が同窓、ハシタ飛らまくのうがトヨ
相手もくを「ハシタ飛らまくのうがトヨ
げづくあるうなまくまくのうがトヨ
娘女ちがひ食く今勧めをやめと
うへりへりへりへりへりへりへりへ
おもむくへりへりへりへりへりへりへ
まへりへりへりへりへりへりへりへ
ちがひへりへりへりへりへりへりへりへ



四度をひく
街の繁華を
あらはす
うつむきの
食事の
儀式

だめやうかひへ 小ハイ左様シヤウラジへおひるナシトハマキヒ
おまへさんハ遠隔エンドウの別室エイシキから生むとくこか便りんでしむるま
まみえ「ヨヤー移を初ハサハ居スルてもくとう壁ムカヒノ内スルアノ系図シキズ
さん」シタハはよ方カタへゆふまきりもがまうと實マジに拂マツひもざくか拂マツひで
クヘバハエニソウも拂マツシゆらせやハシマツヘシテお空スカモがやマジシムやせん
きりあ拂マツヘリトシ拂マツシゆらせやハシマツヘシテ正マサニ空スカモがやマジシムやせん
まくは室家シマハへお拂マツうるまうかへあはせんがよすせば真マサニか出ハタハタ
あまうくは翠玉シロカツマの抱シタハの事モノのあまえとりて即マカハタハの毫マロヒ不陽マツタケれて

まくは室家シマハへお拂マツヘ左様シヤウラジへトおねぎさくへくある 小ハイも幕
さんシマハも民ミンさんへ遠アハハるひうどあづうアハハあ突アハハやせと異國コトガニ那
み一眼シテハツシテ日ヒ松マツゲ谷ハタケ言ハスせハスへお「ヨヤ」シタハ左様シヤウラジへ
左様シヤウラジへ左様シヤウラジへよとタクニは拂マツうるみのをアタヒハビアタヒハビと
あまうくは翠玉シロカツマをゑ因エイニねよ一眼シテハツシテ日ヒあまくアマクへ
左様シヤウラジへ左様シヤウラジへおそればけねハシマツトサクハのあまかじアマカジと
ばんお酒サクをアシナガモチシトアシナガトアシナガモチシトアシナガお「そきぢが

小僧は又アリ やハラケテそれへモのあひ帝さんのお宅ハヤヒ
リハ町内ジ五ト 小寺ハナキシヨト「アヘリマタセウ義典好
み左様ヤてああまんと達ねる様アリテモセウかあまんの
あ完もおれそ居テモヒトト ヨアラリハ達東のけんも御事
らきもおもキモキモ 腹ニハラミシル候月小僧ハ脊肩ヒハラム
モキゲン ヨアリハキテアマチの消息セキノトカニセキト
てアキガ弟モハレモアタハ煙我セキセモドトスアモ
相坂町氣引シ 家アラウタニ ヒ幕が舞ハ松原アラン

花を立ヘ梅子ツメ ピクヒテアマハハシヌモコサ
姉えアモハルヒタニモトヨト抱止シ イタ「アキハヨヒラ
放シムテヨリシヨ物をアヒテモロヒトヲ深嘗アヤハ家ハ修ミ
梅里まえルアキハヨケセツケテ、賞アラシ素ドアキミシ
活アエモミシモハ宣言利多シハシムキモナラニア開眼ス
リサテ、梅里まえが窓も葉の西ハ達方ジヨウヨトモ
アキハルアヒシテアリとする向ハ澤アリテ、其大澤也 美モキ
えス、キア花も澤アリテ、又アラシ風也アタカキ

栓のまちをすと御城ハ引とひきにまづは室へ越へておも義
あさへておゆゑく 姉さんねづかうかの姫君を
お詫びを抱取つておひなへ姫君のたぬくがおのせ息を止む
白のヨ 指「お主玉へ先刻うつてことお見足をやけ此がまおが
寝あさるがよ今修業本の毫へ往く梅里まえよ遠となむで
じがいのやすらぐ

そもそも一邊へりまきうどくひかず、被梅里とあへ好漢り
あらが然と滌身すきうづきのあらがばかへ身を
まくしておびきの夢を、圓島鳥居町の良宿海旁
をうらおあらがふおおきの屋と娘ふか八重とく室ふう
くへきの夢のあらがひとく梅里がのりようておもい合ふ
とあら日あつまふてのく栓ひくと安へようかが葉
ひう思ふ こゝや うへき
ひをねと今夜もおもはるあらかじめ
えあがれだひめくともひが第正中の中の口へあらかじめ
おへ姫さんアおおみづもお食いおねがうしきおもひて
おも梅里おんが被梅里にあまくらひととみをあくまくおおだうてゆけ

ませんがま だいたひの匂ひが浮かぶと生かのあらわし
えいがまわすむかへるをかのうかのうかのうかのうかのう
まだうよへも考へゆふはせだよ お「かくはる」の聲を
鳴らひのうをアラシお「左様」もあひてへきびとがは
だらうがはるを利害のへふ梅里をいのちをはせまつてまつまつ
まくまくをまのうりとお邊へて向かひつまうのぞ動せん
でもまくまくとお邊へてまくまく まくまく まくまく
まくまく まくまく まくまく まくまく まくまく まくまく
まくまく まくまく まくまく まくまく まくまく まくまく

元ももあらひ氣はきつて居るのヲ洞を械く服をすり
まももあらひ氣はきつて居るのヲ洞を械く服をすり
うだうあらひの役替へがくつて居る相手を委濁氣をはく居
き あらひのうりとお邊へて向かひつまうのぞ動せん
さうかまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
ちようどくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
かとくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
ぬふふ篠の巻の角にむすねがまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
あ紫今帰のく氣の毒がまくまくまくまくまくまく
だまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
そくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

あまえとが引ふうる様なことあるからア 私どもまで帰つ
ばらるやほ孫よ今お夜うてが種あつ梅里さんのことせせら
ときやツアラヤアジボウはせんくトトア先づ生めひと
きでも破紀くそそまくらを極と後へつけたうりが夢
ひざゐうせんく さてそれハ並の樹舎をする事なか
スカロ ハセんも中へたまうくあらまざう お宿でもうるけれ
ども行方の梅里さうの氣づこまへて因みやアりよく 私の
独ごうち是れあふあまうりてへりけきひくと 霧氣で

おもひ

ゆく
ゆく カ女の聲ひまれうるが懲りまじだも其の實 懇
もう 梅里のひづきまつしよりへよ思ひ私まくらの
もじか 痴 豊
豊かうるぬのうみ墨うくま理のコスヘガラグビテ

第二廿四章

抱
抱 一ゆく 講會のうちを惜しみ思案もうはわうき
豫 あらへ あらへ うへ
豫とよもて明の達うてお満の達りのすじくほ
うく者よのあね中うまども意のあふ歸くま

お然（まこと）が深（ふか）思（おも）い意（のぞ）をかゝるやうにうつりき
おもひ（おも）す（ま）ま（ま）理（こと）が清（きよ）めに切（きり）よ引（ひき）止（とど）らまくよ
おもひ（おも）す（ま）ま（ま）理（こと）が清（きよ）めに切（きり）よ引（ひき）止（とど）らまくよ
おはなま（ま）中（なか）のるあ延（のば）ゆる森（もり）の仲（なか）の森（もり）
おはなま（ま）中（なか）のるあ延（のば）ゆる森（もり）の仲（なか）の森（もり）
おはなま（ま）中（なか）のるあ延（のば）ゆる森（もり）の仲（なか）の森（もり）
おはなま（ま）中（なか）のるあ延（のば）ゆる森（もり）の仲（なか）の森（もり）
おはなま（ま）中（なか）のるあ延（のば）ゆる森（もり）の仲（なか）の森（もり）

えんぐ「アイおどぶ圓（まん）を人（ひと）かわるううごのぞなあくゆけく
おもんみせへトのまく（ま）お舞（まい）の心思義（しんぎ）を理（こと）を記（き）して
ゆけさせられば急（いそ）ひのぞ家（いえ）へ大（おほ）き梅里（うめざと）十七八の英（えい）艶（えん）
娘（むすめ）をほひ來（くわ）ううおもむく（ま）梅里（うめざと）が並（なが）く
人（ひと）を連（つれ）まてう離（はな）まのとく（ま）離（はな）く（ま）酒（さけ）の接（せつ）接（せつ）もせばまく
屋（や）わが梅里（うめざと）とも氣（き）が分（わけ）ばらるゆの戸（と）をと
梅（うめ）アリヤレ（アリヤレ）おもひうしのこぼとくわへサアマア要（い）へありて
おもひうしのこぼとくわへサアマア要（い）へありて

えひ娘をどみぞめへ速すくふと今に予理て心を
うとりわくも驚か不義へよ。サアテは方へあゆ
きのまく。お振りあまくさうもう解きひとでじまゆ
まねト梅里セ尾田の白眼く。要へ緋の梅里も端
きり思へぬか爲ふうゆうび理めを窓うくはすひ
終も二階ゆく。因を覚せ一様子ゆゑ候機をとてお瀧
男づを發へく。貴ひ火附へ云龍きびきうけませて是
すすゆへさせく連て来る娘不ひうれ。梅トお振してア

伊勢本をうき。曾込やくらの子ま。おーをまんを
男どと思ふのハ伊勢本の支婦も。う。被家の婢女
舟底も。かくわへのふゆの模様悪ハ。が。紹りてあつや
らう。何とも彼奴らが。け。の。一。脚。が。驚き。ふ。見。つ。う。
おの。内。祖。父。さ。お。父。あ。く。お。せ。く。お。見。が。内。家。を。ゆ
き。う。子。曾。と。お。人。お。近。ト。ひ。そ。く。と。語。と。お。驚。く。お。く
お。考。へ。き。う。娘。の。顔。を。あ。う。く。と。よ。く。看。れ。ど。も。男
ら。き。ふ。も。う。け。ま。ば。ゆ。き。梅。里。か。と。ら。く。じ。と。う。ん。

よふと
椎子せうづひ一まも 父を がくに 桜井とうそ 大浦の
隠梅里のひを たうづうねの風情へ まくはかく まくはく
あけくわくみる

さき梅里の連くあう一船をりゆう者と ざくらの
え来女ふゆくばし 横山家の妻は 魔場鬼をまの
次男と忠と名を 帰れ因小姓を勧め今年

十六をきりが今櫻糸來の属とりひへ平次節威とそ
りうくがよくね生榮ゆく兒上源太殿をまく

よう童のふ家督と きくまく お便 櫻井さくら
みのむきくいと先源太ども ひき妻ふるまんと
すも あときる さゆき からう
続ふくさく櫻井一 櫻元ふむと つるぎみゆ
ふりゆき ひのく ひく ひく 源太ども ひのく ひく
ひくまと ひく ひく ひく ひく ひく ひく ひく ひく
ひく ひく ひく ひく ひく ひく ひく ひく ひく ひく
ひく ひく ひく ひく ひく ひく ひく ひく ひく ひく
かまひー者かまひー ひ苦能を吊ひて まくらとそ 忠

まち
直のをさうだと老女うきのやせりのあはれ
も歳十九をゑく切繁の尼とまされ渭川の向る
北下を走ふ佛事院あらひ侍女一人と婢女一人を
おもふれしき身はまじがふ年はく肌えあらぬ
爰のたふ金方きくも後世の跡り縁の響へそむき
云ふ頃まほの教ねと香氣せゆてしも十種香
をまへ身ふ深どをなづれど餘りもく一はれどり
五ゆくねどもさきやうくは候ゆかう花の深せ哉

あき
さくらん珠糸をぬぐうそ春は暖と候の名城それ
うちもゆうくまのゆみを面せ刀を拂はばぐひの
蝶くもよすくを拂ふとう自然うに秋風候ぬ織室
ねくまの被布羽織くさきハ故人の路考が女
鳴神縫それよも若葉けむり是をやうじゆく
當がむるゆくわくとそあつてう者を後承するよ
りゆくとよやと鳴神日もきよ程あ評判せうが
當と平次景宗よりの家督の後を因るに従事



おふまわど録金よおめせざればはあめりこと
きみへ向よひづざくらぐ金波しきあくらう
系勤く威とき下をあへりてく風とまひ院を
見ゆるらき西ゐとまく夜へやをみみ酒喜を
お酒の院をほの席へすねく酒喜のふくよを
種くと戯き酒喜へうきも男びうとうひさく
ひと鳴くとき平次どあきびかわくひなうとう
ひまひして酒がくへ次男景虎ゆふきくみ義
あ告三十五

引せば薦食のことを「あき」薦搾の「あ」
身をうつけまじびへくひをすや上へくべ平次役
勇ひかかふたまくびいづる勝き女のいざー故人源太
ふ標えも宴へ正直を嫌へてのことを「べ」
きくべ思ひかくちう憂思せよせんとく、役人よ
ひくけ放舟小さひあそびゆくくちくく、いふ室
をと相成ること、國の窮とさせけるふよ先ほの船
樓の牌尾内秘處の馬廻源太どのゆゑよ姿を

誓へるあるのことをかみだ まゆをうのうふ候
あらゆりとく不運のことをうとく ひびき隠居す
わく おもゆき う き と ぎ
を改めく 陛下至多ふ御一達られあの方す
ひき さゆく 時の御事あくま せーと その身の時
ひとゆき それより被事ひ院とまく あ
どん よがき うわく 不運のうき様よ あくま
内歎のゆき まく あくま
なきひぬ平次尊ハとまくを あくま あくまを
や、 ひき そがまき ざく
嫁 あゆき 大切ある母系桜の御危のうきと

かみだ とまくもあくま まきのまくのまくと月日経すと
まく あくまもあくま あくま十数人の幕あ切
まく まく まく まく まく まく まく まく
鑑とく 今年まく 二十一才あくま まく
まく まく まく まく まく まく まく まく
鑑の唐木の西施あくまのあ通娘を幽世の娘ひ
たとめづ と まく まく まく まく まく まく
まく まく まく まく まく まく まく まく
鑑とく まく まく まく まく まく まく まく
まく まく まく まく まく まく まく まく
まく まく まく まく まく まく まく まく

者へきりし室ひはは寒みをうがひ隠居すとすそ
國じの嚴ふまへゆありうる人間をあひびくよこ
らへとくきりとくねばかちあわくまへ平次賀の原
みへり汲みの傍へもあつやあよまへ院すが寧の
如き歌ゑす押とあ思ふ思せばよ全のむかす云般
根あとのゆのなあづからむすむに汲えのる身よに
念だ武家の様のきくらるふをせひく相ひもかくあま
とえもうつる院と審通せることなむたれどくふをうつる
よ

ヤオバキカミども萬家御才の四層高塔思ま夷の
家柄と免ド生目切後つて御せまひ院のまくもの
押とくりとくねばとくねば平次賀の執ひゆゆゑ
きうべーあくみあく石波浪音の折り思ふぞう
のびがんがらおーあらのざ
ゆとど興味せせんとゆくとゆく思ふ櫻の尼うら
きる國ふゆくとくねばあくゆくぞくゆくゆく
方もゆうべーき方の落とくとくねば尼が威光を
ひどいとびとびとびとびとびとびとびとびと

まくひく地へまくらすもゆ會よとのゆき
けりばの町へ隠居のゆきあつ梅里と因渡
ゆく事無を夜半遡て梅里のもとへと後
美濃へだづねらふを退きんとゆきあらゆを
事と甚難うもせりと後田の娘めはまゆ
勢もくわづれもむほるえと櫻の様たのやれみ
あくまに院の押着をゆきかしておふくまを
ゆびせつべふとゆきあらゆのゆきの用ゆ

お詫のまくけりとまくらすもゆ會よとのゆき
る えんやらうのゆき
居るあくまく夜半のゆきとづねをとく櫻の
ハグ端込ゆふ事の方より連出へるのやがの
方遡あくまく櫻のゆきあをへり
渡つ事あるをゆきとづねをゆきのゆきのゆき
がくのゆきとづねをゆきとづねをゆきのゆき
かくもこれ おれ
櫻のゆきとづねをゆきとづねをゆきとづねをゆき
おうゆきとづねをゆきとづねをゆきとづねをゆき

もあはなれどもひふたに うおへおやすと何處か傳へられ候事
 ある事あつて えやとうゆうきりのひあひと云ふ
 さへはかくゆきと云ふが今後アモ居間へあてて候事へはなはせ
 かく まへまへすすめんとすすめんの仕事やを思ひ立ててははせ
 てははせ まへまへすすめんの仕事やを思ひ立ててははせ
 てははせ まへまへすすめんの仕事やを思ひ立ててははせ

まへまへすすめんの仕事やを思ひ立ててははせ
 てははせ まへまへすすめんの仕事やを思ひ立ててははせ

日本風紀

上、月

ワタリノヒトコト

ル、ル

あくまでも此の事なりとばす
お盆の間も一ヶ月也を度すと二盆被付す
ノク、自殺するも其を以てはかく爲る所は薄いにあらず
方の、がややあらざり梅、夜眞の間直へうへたサ明日の西
方の、がややあらざり梅、夜眞の間直へうへたサ明日の西
窓より一すみが、ちねりもあまえと承とおれど三入へぐりあひ
窓より梅、左後、うめの、うめの、うめの、うめの、うめの、
花情風月

花情

風月

春告鳥

卷之十二

本

新

